20代未婚男女の避妊の意識と行動に関する記述的研究

著者	奥村 有加, 杉浦 絹子
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	107-112
発行年	2012-03-15
その他のタイトル	Descriptive Study on the Awareness concerning Contraceptive and Contraception Behavior of Unmarried Males and Females in their 20s
URL	http://hdl.handle.net/10076/11922

20代未婚男女の避妊の意識と行動に関する記述的研究

奥村　有加[1]，杉浦　絹子[2]

Descriptive Study on the Awareness concerning Contraceptive and Contraception Behavior of Unmarried Males and Females in their 20s

Yuka OKUMURA and Kinuko SUGIURA

Key Words: twenties, unmarried, contraception, behavior, awareness

I. 緒　言

今日，性の低年齢化と多様化の傾向の中で，未婚の若者の性感染症，望まない妊娠はリプロダクティブ・ヘルス上の大きな問題となっている．わが国では男性用コンドームが避妊方法の大半を占めるため（United Nation, 2009），男性が避妊行動を実施しなければ望まない妊娠が避けられない現状にあるといえる．しかしその一方で避妊行動の決定にはカップルの関係性や男女間での知識の質および量の相違などが関連していることも伝聞される．そこで本研究では，20代の未婚の男女の避妊行動と避妊方法に関する意識を明らかにし，性教育のあり方について考察することを目的として，20代の未婚の男女に半構成的面接調査を実施した．

II. 研究方法

1. 研究参加者および調査期間

研究参加者は，本研究への参加同意を得られた東海地方在住の20代未婚の男女各々5名計10名であった．研究参加者への依頼は，まず研究者の機縁のある者へ依頼し，その後，研究参加者が次の研究参加者を紹介する雪だるま方式を採った．調査期間は2009年9月～10月の約2か月間であった．

2. データ収集方法および分析・記述方法

面接調査はインタビューガイドに沿って研究参加者の年齢・職業，パートナーの年齢・職業，交際歴などの質問から開始し，避妊方法について，セックス時妊娠の可能性が気になるか，今妊娠した場合どのような対応をとるか，元パートナーと現在のパートナーとでの性行動の違いなどについて，研究参加者の体験や実状を思いのままに語ってもらった．面接内容は，研究参加者の許可を得て，ICレコーダーに録音し，その後逐語録にした．

分析は質的帰納的に行った．まず，意味内容のまとまりごとに語りの内容を簡潔に表すことばを記すとともに，語りの意味や意図に関する研究者の解釈を記述した．次に研究テーマに合致するトピックスを抽出し，トピックごとに語りを編成し，解釈とともに本文として記述した．なお，典型的な語りをイタリック体で示した．

3. 倫理的配慮

本研究の趣旨，研究への参加は自由意思に基づくこと，学術目的に限ったデータの使用，個人情報の匿名化の保障，調査終了後のデータの適切な処理，中途辞退の自由について口頭および文書にて説明し，研究参加への同意を文書と口頭にて確認した．

III. 結　果

1. 研究参加者

研究参加者のうち女性5名は複数校の看護系大学の学生で年齢は21歳から23歳であった．男性は社会人

1　三重大学医学部看護学科第9期生　The 9 th alumna, School of Nursing, Faculty of Medicine, Mie University
2　川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科　School of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare

2 名，大学生 2 名，大学院生 1 名で，年齢は 22 歳から 29 歳であった．

2. 避妊方法

1）現在の避妊法

男性参加者 5 名はコンドームもしくは膣外射精を避妊法としていた．女性参加者はコンドームとピルの併用，コンドームとオギノ式の併用，膣外射精を避妊法としていた．男女ともコンドーム使用者は，コンドームは 100％の避妊法ではないという認識を持っていた．しかし，コンドーム使用者でも更なる避妊効果を求めて他の方法と併用する者，避妊効果が高いためコンドームの単独使用で満足している者とがおり，同じ 100％の避妊法ではないとの認識であっても，実際の避妊行動には差があることがわかった．さらに，コンドームを使用していると語った者でも，使用法を聞くと射精直前にコンドームをつけるなど，不正確に使用している者もいた．膣外射精については不確実な避妊法であるという認識のもとに実施されていた．

2）望ましい避妊法

男性は，コンドームの使用を望む者と膣外射精を望む者とに二分された．さらに，どの避妊法を選択するかは自分の将来設計を描いているかどうかによる，という発言がみられた．女性では，現在避妊を実施している者はそのままの方法の継続を，避妊していない者はピルやコンドームの避妊法を望んでいた．

3）避妊する理由

男性では，非計画的な妊娠は避けたい，結婚前の妊娠は避けたい，今後も彼女とより良い関係を続けていくため，などがあった．自分の現状を考えた上で，今妊娠というのは困るという認識を持つ者が多かった．

出来ちゃった結婚とかいうのはちょっと避けたくて，もっと計画的に行きたいなって思ってるんでコンドームを使ってるって感じですかね．（男性）

女性では，親が厳しくて出来ちゃった結婚は考えられない，自分の将来像を描いた時に妊娠しては困る，などが語られ，男性同様，今妊娠は困る，という認識があった．しかし女性では，パートナーが準備してくれるから任せていると，主体的ではなく避妊を男性任せにしている現状も語られた．

今の時点でやっぱ学生だし，向こうも働き始めたばっかだし．お互い親にちゃんと“結婚します”とか言ってるわけじゃないし．実際出来てしまったら本当に困るし．“この人ともっと続くな”って思ったから，今焦らなくても！って感じ．今危険なことしなくても，って思った．（避妊は）相手任せかな．でもちゃんとしてくれるから任せられる感じ．（女性）

4）避妊しない理由

避妊しない理由として，男性からは性感，金銭的な問題，購入の手間などが語られた．また，自分は大丈夫，今までも大丈夫だった，という根拠のあいまいな自信が語られた．

…自分はできにくい方だと思ってしまっとる．…確率とかで考えると低いやん．「大丈夫ちゃうん」みたいな．性感が損なわれるってのもあるし，まあ，買うのとかもめんどくさいってのがあるかな．“手元にない！”みたいな．（男性）

女性からも，男性同様「自分は大丈夫」「今までも大丈夫だった」という認識を示す語りがみられた．また，相手に避妊の主導権があるため，避妊に対して口出しできない男女関係も語られた．

男性側の“避妊しない理由”の回答に「女性が求めてくるため」との回答があった．

「やっぱ生でしたいし，中に出してほしい．だからピル飲もうかなって思ってる」って（彼女に）一回言われて．言われる前は避妊はしたかったけど，100％．で，そっから“まあ，この子はいいんだ”っていうイメージになった．（男性）

女性側の語りの中にも“性感を求める“との語りはあったが，実際は，拒否ができなかった，その流れになっちゃうと断れない，場の雰囲気を乱してしまいそうで，嫌って言ったら相手を傷つけちゃうんじゃないかって思って，など相手の感情を中心に考え，自分を押し殺してしまう場合があることがわかった．

雰囲気の流れでいってしまうのに“ダメ”って言うのが言えなかったし．言うこと聞くからかわいいと思ってもらえるってのを感じてしまっとったから．別に何か指図されてそのままやるとかいうわけじゃないけど．なんか言われるがままにいる彼女がかわいいみたいなのを感じとって．だからなんか抵抗とかいうのはあんまり出来なくて．（女性）

3. ピルについて

ピルについては女性のうち 3 名に服用経験があった．

1）ピルに対する考え方

今回の研究参加者である男性は全員，避妊方法の一つにピルがあることを知っていた．しかし避妊機序の理解の乏しさや副作用への不安，費用などの理由から

パートナーである女性の服用には消極的であった．

どんな副作用あるかわからへんし，合う合わんもあるし．ピルだったら，余計なお金かかっちゃうし，相手に対する負担も大きくなっちゃうし．（男性）

他方，女性の場合は男性と違い，ピルそのものへの抵抗感は少なく，むしろ，避妊効果に加えて月経痛軽減などの副効用への期待も語られた．しかし，服薬管理や経済面などから選択されにくい避妊法であった．またピルを使用しない理由として周囲に服用している女性がいない，コンドームは周囲の多くの人が使用している一般的なものであると語られた．

ピルは生理の症状とかが結構ひどいもんで考えてるんやけど．それで一緒に，ついでに（避妊も）できるなら良いかなーみたいに思ってて．でも管理が大変そうで…．お金もかかるしな．コンドームに比べて．（女性）

2）ピル内服の動機

ピル服用経験のあった3人の女性全員の服用開始の動機は，彼が避妊を行わないというものであった．避妊しないため妊娠の恐怖を抱えるが，別れたくないのでピルを服用することにしたというものであった．

ゴムを全然つけてくれんくて，私も全然ピルを飲んでなくて，ずっと何回も何回も生理がこんくなったりして，不安になることもいっぱいあったから．いろいろ考えてピル飲むことにしました．ピルしかないと思ってた．（女性）

4．妊娠について

1）妊娠した場合の対応

男性参加者の大半が，“妊娠させたら責任をとる”イコール“結婚”という考えであった．男性の場合，経済的・社会的に自立している場合は産むという選択をする．しかし，学生の場合は「責任をとる」という意識はあるものの，パートナーや自分の将来を考えると「女性が産む」ことを安易には選択できないのが現状である．

もしできた時はその時に話し合って決めていこうって思ってます．もし二人で“できちゃった婚でも良いから結婚してしまおう！”ってなったら，結婚するし，“子供諦めよう”ってそういう結論がでたんなら，そうするし．ただ，まだ話し合ってないんで，どうしようってのはまだ決めてません．（男性）

女性では避妊をしっかりしていると認識している者には妊娠という想定はありえず，不確実な避妊をしている者は妊娠の不安を常に抱えていた．しかし，学生では将来設計，子どもの命の大切さ，中絶の恐怖を天秤にかけることになり，答えを出すことはできないと感じていた．

めっちゃ困るな…．どうしよってなるな…．そんなこと全然考えてなかった．（コンドームとピルを併用してて）出来ることなんてあるのかな？友達で堕ろしたって子がおってさあ．でもなんか“しゃあないよな”って思っとったけど，自分で置き換えて考えると怖いなー．おろすのも怖いし．身体が傷つくのが．その後だって，ずっと引きずっていくわけやんか．精神的なところでも．やっぱ，おろせないかもしれん．（女性）

2）妊娠・避妊に対する意識の変化

女性では月経が遅れるというハプニングに遭遇するまでは相手任せの避妊であることが多く，月経が遅れた，妊娠したかも，という不安を味わうことがその後の避妊行動に影響していた．また男女ともに，出来ちゃった婚は避けたい，友達の中絶の話を聞いて怖いと思った，などの発言があり，身近な者の体験を聞くことが妊娠や避妊に対する意識に影響を及ぼしていた．

何回も何回も生理が来なくなったりして，不安になることもいっぱいあったから．なんか，そんなことになるなら…そういう気持ちになるのも嫌だったし，今の時期に出来ちゃったら将来ぼうにふるってのがやっぱりあり得ないことだし．…ゴムしてたけどできちゃったって子も友達にいて…．友達にそういう子がいたから“怖い”ってすごく思って，（ピルを）飲み始めた．（女性）

さらに，学生時代には避妊行動に積極的ではなかった男性参加者は社会人になって人生設計に絡めて妊娠と避妊のことをより真剣考えるようになったと語った．

…（結婚や妊娠は）たぶん社会人になっても1年2年くらいは経済力，あってないようなものやから難しいと思うよ．学生の頃はなんか結構…．同棲しとったから毎日会っとったし，あんまりそういう意識はなかった．考えてなかったなー．“子どもできたらどうしよう…”とかは．…（彼女の生理が）遅れたりしたらすごい心配するし，もうそういう心配するんやったら，つけてやろうぜ！ってなった．（男性）

5．パートナーとの避妊行動：パートナーによる相違

男女とも，今の人はつけるけど昔はつけなかったなど，パートナーによって避妊行動に相違がみられた．男性と女性の相違点として，女性の場合は，パートナーが替わることで自分の意思を伝えることができるか否か

も変化していた．パートナーが替わった後に避妊行動が変化する理由として，男性は相手の要望に合わせるから，があった．他方女性では，パートナーとの関係性により自分の意思が伝えられなくなることがあった．

今の人は最初つけなくて，だんだんつけるようになってきた．けど，前の人は最初は「心配やからつけよ！」ってなって，だんだんつけなくなってたな．あと，ここまでちゃんと付き合った彼女は，初めてやな．2年半って．今では3カ月とかそんなんやで．（男性）

あたし結構（今のパートナーには）なんでも聞いちゃうから．その人には．聞けんかったんやって．前の人には．（女性）

VI. 考　察

1. 避妊行動の実態

第6回青少年の性行動全国調査報告（日本性教育協会，2007）によると，「避妊をする」と回答した者の避妊方法としてコンドームを挙げる者は，大学生男子では100%，大学生女子で96.5%であり，若者の主たる避妊法はコンドームであった．膣外射精法を挙げる者も大学生男子で21.4%，大学生女子で30.3%に及んでいた．本研究における参加者の大半はコンドーム，膣外射精，オギノ式を避妊法として挙げており，先行研究と同様であった．また，国内のピルの普及率は1%（United Nation, 2009），2.5%（武谷，北村，2008）と低いが，本調査の参加者では女性5名中3名のピル服用経験者がいた．これには女性参加者5名全員が看護学生であり，ピルに対する正確な情報を持っていることが影響していると思われる．

10代の人工妊娠中絶についてのアンケート結果（日本産婦人科医会医療対策委員会）によると，人工妊娠中絶経験者である女性の19%がコンドームを使用していたと報告されているが，本研究ではコンドームを不正確に使用していた者もおり，コンドームの失敗率が高い原因につながっていることが推察される．

2. ピルについて

研究参加者全員がピルが避妊方法の1つであることを知っていた．しかし，男性参加者ではピルに対する知識が乏しく，使用に抵抗感を抱いている者も多かった．他方女性はピルへの抵抗感は少なかった．既述のとおり，女性参加者全員が看護学生であり，ピルに関する正確な情報を持っていることが影響していると思われた．木村ら（2007）は，ピルについての講義を行った後ではピルに対する理解度が増し，ピルについては半数以上が服用の意向を示すと報告している．正確な情報提供はピルへの意識に影響すると言え，今後は特に男性への正確な情報提供を行うことが有用と考える．

しかし，ピルの効用を理解していても，管理や購入の手間，金銭的な問題によりピルの服用を躊躇する女性が多い（武谷，北村，2008）と報告されているが，本研究においてもピル服用を躊躇する女性からは同様の理由が語られた．また我が国では，欧米諸国と異なりピルは医師による診察と処方が必要である．このような現状から考えて，情報提供というソフト面の取り組みのみならず，日本国内でのピル販売に関する法整備などのハード面の取り組みもピル普及にとっては重要と考える．

また，従来，ピルは自立的な女性が服用するもの，女性の主体的な避妊方法等と言われてきた（北村，1996）．しかし本研究では，女性参加者のピル服用開始理由には「彼が避妊を行わない」が挙がっており，ピルは女性の主体的な避妊法であるとの捉え方とは対極にある現実が浮き彫りとなった．女性のピル服用までの感情は，避妊しないため妊娠が怖いが別れるという選択をしたくない，だからピルを服用するというものであった．別れを選択しない理由は，好きだから，セックス以外のところで彼に求めているものが多い，避妊してくれないイコール大事にしてくれないとは思わないなどがあり，パートナーが避妊行動をとらないことが関係性を決定する要因とは捉えていなかった．「セックスが一番のポイントでない」との語りもあり，女性は，自らがピルを服用して避妊することと性行為以外の側面で相手から得られるものとを相殺していると捉えられた．

3. 避妊行動に影響を及ぼす事柄

避妊していると答えた参加者は男女ともに，自分の社会的な立場を考えた上で避妊行動が決定されていた．避妊しない男性は「（妊娠について）怖いが実感がない」「自分のやりたいことが明確になると，避妊に対する意識も高まった」と語っていた．自分の将来設計があるかないかが避妊行動に影響を及ぼすといえる．さらに男性が避妊しない理由では，性感や金銭的な問題，購入の手間など自己中心的な理由が目立った．男性は性交に対して“快楽”を求める（金田，宇都宮，下薗，1997）が，性交の3要素のうち連帯性よりも快楽性に重点をおいている場合には，このような理由が挙がるのだといえる．しかし，望ましい避妊法を尋ねた際，男性参加者から「『セックスライフ』か『生きる上でのベストなのか』によって，望む避妊法は変化する」との語りもあり，「快楽」と「将来設計」のどちらに重きをおいて考えるかによって選択する避妊法

は変化するといえる．ゆえに，特に男性に向けた性教育においては，将来設計の視点を取り入れた性教育が有効であると考える．

次に女性について考察する．男性参加者から避妊しない理由として「女性が求めてくるため」との発言があった．「相手に『生で』と言われて，『この子はいいんだ』ってイメージになった」との語りもあり，女性の発言や意思表示により男性の行動に影響が及んでいることもある．その一方で一部の女性参加者は相手の要望を断りたくても断ることができないと語っていた．金田ら（金田，宇都宮，下薗，1997）は女性が避妊の意思表示が出来ない理由の背後に「『避妊に慣れた女イコール性交経験の多い女と思われるのではないか』という不安が隠れている」と述べているが，本研究では「相手によって自分の意思が伝えられないこともある」「年上だから言えない」などの語りがあり，『性交経験が多いと思われる』という不安よりパートナーの年齢や性格，それに影響された関係性によって自らの意思を伝えられない状況があるといえる．灘（2005）は，避妊の話し合いや意思表示をした女性が少ないことについて，日本人の中に長年儒教に基づく男尊女卑の考え方により性関係は男性本位であり，その考え方が生き続いている，としている．本研究においても，避妊はすべて相手任せにしている女性参加者もおり，主たる避妊法として男性コンドームが使用されていたことも考えると，性行動において男女の平等な関係が築かれていないカップルが少なくないのが現状と言える．他方，女性参加者自身が妊娠して困るのは自分という意識を持つことで，避妊に対する意識が変化し，避妊しない男性との別れに踏み切るなどの行動を起こすきっかけとなっていた．ゆえに妊娠して困るのは女性自身という意識を持つことが，確実な避妊行動に繋がると考える．

コンドームの使用理由では皆が使用している，一般的，などの意見が挙がっていた．ピルについては「皆が使っていないし，どんなものなのかわからない」，避妊しない理由として「周りも大丈夫だったから，自分も大丈夫だろう」，避妊する理由として「友達が妊娠して怖くなった」など，周囲の者の経験が避妊行動に大きく影響していることがわかった．避妊しない理由として男女ともに「大丈夫だと思う」「自分は妊娠しにくい（させにくい）と思う」など根拠のない自信や誤った経験の積み重ねが避妊に対する意識を低下させるといえる．よって，避妊の機序や避妊方法等の情報提供のみならず，妊娠・中絶の具体的体験談を提示することが避妊意識の向上に向けたより効果的な性教育に繋がると考える．

Ⅶ．結　論

1. 実施されている避妊法はコンドーム，膣外射精，ピル，オギノ式であったが，女性は男性に比してより確実な避妊方法であるピル，コンドームを望んでいた．
2. 男性はピルの知識に乏しく，パートナーがピルを服用することに抵抗を感じていた．
3. 女性参加者中3名にピル服用経験があったが，服用開始の動機は「男性がコンドームを使用してくれないから」というものであった．
4. 避妊行動に影響を与える事柄として，「将来設計」「パートナーとの関係性」「身近な友人・知人の体験」「自身の体験」があった．

以上より，具体的な避妊の仕組みや避妊方法のみならず，ライフプランニング，自分自身を大切にすること，避妊行動における女性の主体的な決定，男女間の対等な関係性の構築の視点を強調した性教育が必要であることが示唆された．

本研究の限界

本調査は一地方の便宜的サンプリングを用いているため，導き出された結果を一般化するには限界がある．

本研究は，平成21年度三重大学医学部看護学科卒業論文として提出した論文に修正を加えたものである．

文　献

金田弓子，宇都宮理絵，下薗尚子他（1997）：大学生の避妊に対する意識と行動，母性衛生，38（1），18-24

木村好秀，斉藤益子，菅睦雄（2007）：看護系大学生の性意識・性行動の実態とピルの使用意向に関する調査，母性衛生，48（1），66-73

北村邦夫（1996）：ピルの分かる本，日本短波放送，東京，132-149

灘久代（2005）：初産婦の婚前期における避妊意識と避妊法の選択，母性衛生，45（4），439-444

日本女性心身医学会編（2006）：女性心身医学 TEXT BOOK，永井書店，大阪，163-170

日本産婦人科医会医療対策委員会：10代の人工妊娠中絶についてのアンケート結果から，http://www.jaog.or.jp/japanese/MEMBERS/TANPA/H15/030217.htm，2011年9月25日アクセス

日本性教育協会（2007）：「若者の性」白書－第6回青少年の性行動全国調査報告，109

武谷雄二，北村邦夫（2008）：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）研究「全国的実態調査に基づいた人工妊娠中絶減少に向けた包括的研究」：第 4 回男女の生活と意識に関する調査報告書，117

United Nation, Department of Economic and Social Affairs, Population Division. World Contraceptive Use 2009. http://www.un.org/esa/population/publications/contraceptive2009/contraceptive2009.html, 2011 年 9 月 25 日アクセス

キーワード：20 代，未婚，避妊，行動，意識